

李賀の詩における「書客」をめぐる

小田 健太

一 はじめに

李商隱（八一三～八五八）の「李賀小伝」⁽¹⁾には、詩作に没入する李賀（字、長吉。七九〇～八一六）の姿が描かれている。

それによれば、李賀はくたびれたようなロバに乗って散策しながら詩想を練り、思いつくごとに書き取って袋にしまいこんだ。帰宅するや母親が袋の中を見て、「この子はきつと心を吐き出し尽くしてしまうまではやめないだろう」と嘆いたという。このようにして詩作に没入した李賀は、白玉楼という楼閣が完成した記念の文章を書くためにやがて天帝によって天上に召されたという。天帝は李賀の表現者としての特異性を高く買ったのであった。

「李賀小伝」の逸話には、誇張や虚構が含まれていると見なければならぬが、それによって、李賀がとりもなお

さず表現者として生き、そして表現者として死んだのだということが示されているのは確かである。つまりは李賀の生と死の事実を報告するためではなく、その真実を伝えるために「李賀小伝」は書かれたのである。

「李賀小伝」は李商隱という他者の手になる李賀の表現者像を提示しているわけであるが、それでは李賀自身は、果たしてどのように表現者としての自己を自作の中に描いたのだろうか。本稿では、「書客」の語を手がかりとしながら、その点について考察を加えていく。

二 「書客」の語について

本稿において主として着目する「書客」の語を、李賀は「高軒過」・「題帰夢」・「秋来」の三首において用いており、後述するとおり、それらはいずれも李賀自身を指すものとして詠じられている⁽²⁾。また、「高軒過」は八〇九年、「題帰

夢」は八一二年、「秋来」は八一六年の作であると見なされているという点からして、短い詩作期間の中ではあるが、李賀は「書客」としての自己を継続的に意識していたといえる。

「書客」の語は、それまでの多くの詩人によって常套的に用いられていたわけではなく、李賀に特徴的な詩語である。漢魏六朝期の詩に「書客」の語は見当たらず、唐詩においても数例が検出されるにとどまり、しかもいづれの用例も、能書の者を意味していたり、自己ではなく他者を指すものであったりするため、李賀と同断には扱えない。「留書客」や「読書客」といったように「○書客」の三字がひとまとまりとして詠じられている例も、李賀の「書客」とは区別しておくべきである。

「書客」の訳語については「書生」を筆頭に、「文学青年」や「文学者」「詩人」など、種々の語が当てられている。しかし、訳語としては種々の語がありうるとしても、李賀としてはその語でなければ表現できない自己認識を、「書客」の語に託したのであったのだらう。そうした自己とはすなわち、ものを「書」くという営為に重きを置く、表現者としての自己である。

広い意味での表現者を意味する語は、無論李賀以前から

多く用いられている。その一つに「書生」がある。これは他の唐詩にも多用されており、李賀も一例のみではあるが次のように詠じている。

- 1 男兒何不帶吳鉤 男兒 何ぞ吳鉤を帯びて
- 2 收取関山五十州 関山五十州を收取せざる
- 3 請君暫上凌煙閣 請ふ君暫く凌煙閣に上れ
- 4 若箇書生万戸侯 若箇の書生か万戸侯たる

〔南園十三首〕（其五、五二二頁）

この詩について、原田憲雄『李賀歌詩編一 蘇小小の歌』（東洋文庫、一九九八）には、次のように記されている。

……この詩の大意は、英雄になろうというほどの男子なら手段を選ばぬ……。本を読んで、真、善、美などに感激しているような書生っぽは大大名になれっこなし。万戸侯になるためには、学問などするより、武芸にでも励むほうがましさ、といっているのである。

（二九四頁）

つまりこの詩における「書生」は「書生」一般を意味しており、その範疇に李賀自身が潜在的に含まれているのだとしても、「書客」が李賀自身のみを指し示すのとは明確に区別されているといえる。してみると、李賀は従来にお

ける表現者一般の中には収まらない自己を表すために、「書客」の語を用いたのであると考えられよう。

さて、「書客」という目新しい語を三度用い、しかもそのことごとくが李賀自身を指すものとして詠じられている点からして、この語が表現者としての李賀の自己認識を探るための、有効な手がかりになると考えられる。それでは章を改めてそれぞれの用例について順に検討していきたい。

三 「高軒過」——飛翔せんとする「書客」——

元和四年（八〇九）に制作された「高軒過」（八七頁）は、李賀の詩才を聞きつけて尋ねてきた韓愈と皇甫湜の求めに応じて詠じられた詩である。

1 華裾織翠青如葱

華裾は翠を織りて青なること葱のごとく

2 金環庄轡揺玲瓏

金環は轡を庄して揺らぐこと玲瓏たり

3 馬蹄隱耳声隆隆

馬蹄は耳に隠として声隆隆たり
門に入りて馬より下れば気は虹のごとし

4 入門下馬氣如虹

5 云是東京才子

云ふ是れ東京の才子

文章鉅公

文章の鉅公と

6 二十八宿羅心胸

二十八宿 心胸に羅^ななり

7 元精耿耿貫当中

元精 耿耿として貫きて中に当たる

8 殿前作賦声摩空

殿前 賦を作りて声は空を摩す

9 筆補造化天無功

筆は造化を補ひて天に功無からしむ

10 龐眉書客感秋蓬

龐眉の書客 秋蓬に感じ

11 誰知死草生華風

誰か知らん死草の華風に生ずるを

12 我今垂翅附冥鴻

我今 翅を垂れて冥鴻に附するも

13 他日不羞蛇作竜

他日羞ぢず蛇の竜と作るを

来訪した二人の装いや馬具のきらびやかな様子を詠じた上で才能を讃え、末尾の四句において李賀自身の抱負を記す。そこでは、枯れ草がよみがえるように韓愈と皇甫湜の二人に引き立ててもらい、いずれ竜となって上昇しようという前向きな意志をうたっている。

「書客」の語は第十句に用いられている。「書客」とともに詠じられている「龐眉」とはつながった眉のこと、李賀の「巴童答」にも見受けられる。この詩は、李賀が自分の従僕である巴童に向けて詠じた「昌谷讀書示巴童」に対する巴童の返答を、李賀自身が詩に仕立てたものとなっている。二詩を並べて提示する。

- 1 虫響灯光薄 虫響きて灯光薄く
- 2 宵寒薬氣濃 宵寒くして薬氣濃し
- 3 君憐垂翅客 君は憐れむ翅を垂れし客を
- 4 辛苦尚相従 辛苦して尚相従ふ

〔昌谷読書示巴童〕、六八頁

- 1 巨鼻宜山褐 巨鼻 山褐に宜しく
- 2 龐眉入苦吟 龐眉 苦吟に入る
- 3 非君唱樂府 君 樂府を唱ふるに非ずんば
- 4 誰識怨秋深 誰か怨秋の深きを識らん

〔巴童答〕、六九頁

「龐眉」は巴童のような他者から見てもとわりわけ目につくような李賀の身体的特徴であったと考えられる。このことから、「高軒過」における「書客」は、「龐眉」の語との組み合わせによって、まぎれもなく自称として位置づけられていることが確認される。李賀は、身体的特徴と同等の、本質的には変更不能な、自己を自己たらしめている根源的な要素を、「書客」の語に込めたのだといえよう。

巴童は「垂翅の客」たる李賀を憐れみ、辛苦をともにしてくれている。そして、「あなたが樂府を唱えてくれるのでなければ、誰が怨めしい秋の奥深さを知ることができようか」と述べて、李賀の「苦吟」に価値を与えている。

「垂翅」の語は、「高軒過」にも見えていた語である。李賀が「垂」れていなければならなかった「翅」とは、韓愈や皇甫湜が獲得していたような社会的な名声の象徴としての機能を有しつつも、より本源的には、やがて結果的には社会的な名声の獲得につながるはずの、表現者としての自己を象徴していよう。そうしてみると、巴童は李賀の内なる表現者に憐憫を垂れ、励ましを与える存在であったといえる。

さて、「高軒過」における「龐眉の書客」は、「翅を垂れて冥鴻に附する」ものとして描かれている。そしてそれはやがて「竜」となって上昇するはずのものでもある。「冥鴻」とは、訪問してきた韓愈と皇甫湜を指しているが、彼らは翅を広げて大空翔けるものであると、李賀は捉えているのである。そして彼らは「殿前 賦を作りて声は空を摩し、筆は造化を補ひて天に功無からしむ」るような存在でもある。

天子の殿前における賦作によって、空を磨き上げるほどに二人の声価は高々と上がっている。そして二人の筆鋒は、万物の創造を補うものであり、本来その役割を担うはずの天の功績を無みするものであると、李賀は詠じている。「筆補造化天無功」の句について、原田憲雄『李賀論考』

（朋友書店、一九八〇）には次のように述べられている。

「筆は造化を補う」というとき、なお天地の徳を分与せられた人間の功業をたたえることばとして伝統の外に出ずるものではない。「天に功なし」というに至っては、まさに殷帝武乙が天を射た暴虐にひとしく、……無謀の語ではないか。（五三頁）⁶

また、「……この一句こそ長吉の芸術に對する考え方を先人とはつきり分つものではないか」（五四頁）と述べた上で、本稿においても先に引いた巴童と応答した詩に言及しつつ、

万物を造化するのは確かに天であろう。だがその万物の万物たる意味を見出したのは芸術家である。芸術家が明らかにしなければ一切は存すれども無きにひとしい。天が芸術家の筆を仮つて語るのではなく、芸術家の筆が天のことばを摘出し、万物の価値を創造するのである。（五四頁）

と指摘する。一方で李賀は、「天遣裁詩花作骨（天は詩を裁して花にして骨を作さしむ）」（酒罷、張大徹索贈詩、時張初効潞幕、五六〇頁）という、天の補助によって詩の価値が高まることを意味する句を残しているため、表現と天とが必ずしも拮抗するものであると捉えていたわけ

はない。しかし、だからこそ、あえて詠じた「天に功無し」という言葉には、原田論文にあったとおりの重大な意味が含まれていると見るべきだろう。

ここで指摘しておきたいのは、李賀自身の内にも「天に功無からしむ」るような表現者としての能力が胚胎していることが、隠微な形としてではあるが示唆されている、という点である。李賀は「今」は「翹」を「垂れ」ているが、やがて「竜」となって上昇しようと述べていた。それはとりもなおさず韓愈や皇甫湜のような高い文学的境地への接近を宣言したのに異ならず、ひいては自分も「天に功無からしむ」るような「書客」たりうるのだという李賀の展望を示しているのである。

四 「題帰夢」——現実の生活に苦しむ「書客」——

元和七年（八一二）、長安において制作された「題帰夢」（四四三頁）には、故郷の家族を夢に見て、一家を支えなければならぬ重圧に、まんじりともしない李賀の姿が描かれる。

- 1 長安風雨夜 長安 風雨の夜
- 2 書客夢昌谷 書客 昌谷を夢む
- 3 怡怡中堂笑 怡怡たり中堂の笑ひ

4 小弟裁澗菴

小弟 澗菴かんりやうを裁す

5 家門厚重意

家門 厚重の意

6 望我飽飢腹

我に飢腹を飽かしむるを望む

7 勞勞一寸心

勞勞たり一寸の心

8 灯花照魚目

灯花 魚目を照らす

冒頭の二句は、風が吹き雨が降る長安での夜、「書客」

たる自分は故郷である昌谷（河南省福昌県）を夢に見る、と詠じている。昌谷という故郷の地名とともに一句を構成している点からして、ここでも「書客」は李賀の自称として用いられていることが見て取れる。

李賀の「書客」が他でもない自己を表象するための語であるという点については、彼自身の手になる類型句との比較によって、より鮮明に理解される。その類型句とは、「河南府試十二月樂詞」（八月）（三三三頁）に詠じられている、「独客夢帰家（独客家に帰るを夢む）」という句を指す。この詩は、題にあるとおり河南府試に際しての答案であり、ゆえに個人的な感情を盛り込むというよりは、十二の諸月の種々相を、客観的な視点から多角的に描いた作品となっている。

仲秋八月の夜長が人恋しさを募らせて、「独客」、孤独な旅人は、故郷に帰る夢を見る。「題帰夢」にあった「書客

夢昌谷」の句と「独客夢帰家」の句とは、用語・構成ともに

似通っているが、「書客」と「独客」は置換可能なわけではなく、その選択は意図的なものであったと思われる。

李賀は「書客」としての自己自身を明確に意識しており、そうであるがゆえに、他者を表現する際に用いる語彙とは区別していたのである。

このように、李賀は「書客」としての自己を強く意識していたし、「高軒過」において見たとおり、それは他者の引き立てを得ながらやがて天高く飛翔していけるはずのものであった。しかし実際のところ、「高軒過」にも登場していた皇甫湜に宛てた、「仁和里雜叙皇甫湜、湜新尉陸渾」（九一頁）に、

17 欲雕小説干天官 小説を雕して天官に干めんと欲す

るも

18 宗孫不調為誰憐 宗孫 調せられずして誰の憐れむ

ところと為らん

とあるように、首尾よく引き立てを得ることは適わなかった。それどころか、誰一人として憐憫を向けてくれる者でない孤独を、李賀は抱えることとなった。

表現者としての孤独は、「長歌統短歌」（一三五頁）にも示されている。

- 1 長歌破衣襟 長歌 衣襟を破り
 2 短歌斷白髮 短歌 白髮を斷つ
 3 秦王不可見 秦王 見るべからず
 4 旦夕成内熱 旦夕 内熱を成す
 5 渴飲壺中酒 渴して壺中の酒を飲み
 6 飢拔隴頭粟 飢えて隴頭の粟を抜く
 7 淒涼四月闌 淒涼 四月^{たがひ}闌にして
 8 千里一時緑 千里 一時に緑なり
 9 夜峰何離離 夜峰 何ぞ離離たる
 10 明月落石底 明月 石底に落つ
 11 徘徊沿石尋 徘徊して石に沿ひて尋ね
 12 照出高峰外 照らし出だす高峰の外
 13 不得与之遊 之と遊ぶを得ず
 14 歌成鬢先改 歌成りて鬢先づ改まる
- 詩全体の構成について、傳經順主編『李賀詩歌賞析集』
 (巴蜀書社、一九八八)に次のような指摘がある。

「歌成」句既是对尋月未果的總結、也是对開篇兩句的呼応。悲歌始、悲歌終、構成了詩人失望——希望——失望的郁結生成過程。如果說開始的悲歌更多地讓人感到是激烈的話、結尾悲歌則更多地讓人感到是深沈。

(一二八頁、執筆は王守国)

「歌成」の末尾の句は、月を尋ねたがそれを果たせなかったことに對する総括であり、冒頭の二句に呼應すると述べる。その上で、全体は悲歌によって詠い起こされ、悲歌によって閉じられるという円環的構成を有すると指摘している。

第五・六句の「渴」「飢」には、肉体的な飢渴感だけではなく、精神的な不満も包含されているよう。酒を飲むだけでは癒せない飢渴感が、李賀を夜の山野へと駆り立てる。月明かりを頼りに歩きながら、李賀は詩句を練り上げる。「秦王」(第三句)に象徴的に示される政治の場から阻害された李賀は、第十三句の「之」、すなわち月とも親しく交わることができない。李賀は自分を政治の世界に受け入れることのなかった人々への不信を、月とも親しく交わることでできないと述べて、自然物にまで敷衍しているのである。

人間と自然の両者に対する不信任に苛まれながら、李賀は詩句を練り、最終句に到ってそれが「成る」。しかしそうした詩作は白髮を生じさせるほどの労苦を伴う作業なのであった。先に『李賀詩歌賞析集』の指摘に見たように、詩の末尾において完成した「歌」は、改めて冒頭の「長歌」「短歌」を連想させる。「長歌統短歌」が有する円環的

構成は、李賀の不遇感とそれに触発された夜の散策、そして孤独な表現者の姿を無限に提示し続けることになるのである。

五 「秋来」——「書客」としての観念的自立——

続いて、「秋来」（六八八頁）における「書客」について検討を加えていく。

- | | | |
|-----------|----|----------------------|
| 1 桐風驚心壮士苦 | 桐風 | 心を驚かせて壮士苦しめ |
| 2 衰灯絡緯啼寒素 | 衰灯 | 絡緯（らくゐ）寒素に啼く |
| 3 誰看青簡一編書 | 誰か | 青簡一編の書を見て |
| 4 不遣花虫粉空蠹 | 花虫 | して粉として空しく蠹（むしば）ましめざる |

- | | | |
|-----------|----------|-----------|
| 5 思牽今夜腸底直 | 思ひ牽かれて今夜 | 腸 底に直なるべし |
|-----------|----------|-----------|

- | | | |
|-----------|----------|-------|
| 6 雨冷香魂弔書客 | 雨冷ややかに香魂 | 書客を弔す |
|-----------|----------|-------|

- | | | |
|-----------|----|-----------|
| 7 秋墳鬼唱鮑家詩 | 秋墳 | 鬼は唱ふ鮑家の詩を |
|-----------|----|-----------|

- | | | |
|-----------|----|---------|
| 8 恨血千年土中碧 | 恨血 | 千年 土中の碧 |
|-----------|----|---------|

冒頭の二句に描かれている貧寒に加え、自分が書き残した「青簡一編の書」（李賀の詩集）を誰が保存につとめてくれようか、と続く第三・四句に、李賀の悲愴感が表徴される。そんな李賀を慰撫せんと、墳墓のあたりで幽鬼が鮑

照（四二一？～四六五）の挽歌を朗唱する。そして恨みのこもった李賀の血は、土の中で千年の後に碧玉に硬化するという句で一篇は閉じられる。⁽⁸⁾

近い将来における消失が避けられないであろう詩巻に対する愛惜と感傷を、なお詩の形式によって表象せざるを得ないという逆説が、「秋来」に高度な緊張感をもたらしている。

詩全体を眺めてみると、後半には「香魂」や「鬼」といった李賀ならではの不可視の存在がちりばめられている一方、初句には「壮士」、第六句には「書客」という作中人物が登場する。しかも、文脈からしてどちらも李賀自身を指していると解釈しうる。⁽⁹⁾

ただし、「壮士」と「書客」が内包するイメージは異なる。「壮士」といえば、始皇帝暗殺のための出発に先立つて荊軻が歌った、

風蕭蕭兮易水寒 風蕭蕭として易水寒し

壮士一去兮不復還 壮士一たび去りて復た還らず

（『史記』卷八六、荊軻伝）

という句がとみに有名である。それゆえ、唐詩においても李白（七〇一～七六二）の「贈友人三首」〈其二〉（『李太白全集』卷一二）に、

荊卿一去後 荊卿一たび去りし後
壯士多摧殘 壯士多くは摧殘

とあるように、荊軻と「壯士」を結びつけて詠じた例が見受けられる⁽¹⁰⁾。また、荊軻と直接的には関連しない場合であっても、杜甫（七一二～七七〇）の「苦戰行」（『杜詩詳註』卷一一）に、

干戈未定失壯士 干戈未だ定まらずして壯士を失ひ
使我嘆恨傷精魂 我をして嘆恨して精魂を傷ましむ

というように、戦乱によって命を落とす兵士に対して「壯士」の語が当てられることもあった。「壯士」とは、荊軻がそうであったように、過酷な行く末をたどることとなる勇壮な者のイメージを持っているのである⁽¹¹⁾。

それでは李賀は「壯士」の語をどのように用いているか。「秋来」の他には、序文と詩句にそれぞれ一例ずつ見出せる。まず、「公莫舞歌并序」（六九九頁）の序には次のようにある。

公莫舞歌者、詠項伯翼蔽劉沛公也。会中壯士灼灼於人。故無復書。且南北樂府率有歌引。賀陋諸家、今重作公莫舞歌云（公莫舞歌は、項伯の劉沛公を翼蔽するを詠ずるなり。会中の壯士は人に灼灼たり。故に復た書すること無し。且つ南北の樂府率^{おおむ}ね歌引有り。賀

諸家を陋とし、今重ねて公莫舞歌を作りて云ふ）。

「公莫舞歌」という作品は、いわゆる「鴻門の会」において豪傑たちが集合した場面を背景として詠じられることを説明している。『史記』卷七、項羽本紀に収録されている同場面の記述には、「壯士」の語が二度用いられており、それらはいずれも項羽が樊噲に呼びかけた言葉となっている。

ただし、李賀の作品中には、項羽や劉邦をはじめ、范增や項莊なども詠じられていることから、「会中の壯士」とは、「鴻門の会」に登場する人物全体を指し示すものと考えられる。確かに登場人物たちは、武勇の人であっても、知略の人であっても、漢楚の攻防という時代の転換点に遭遇して、意気壯んである点で共通している。

続いて詩中における用例としては、元和七年（八一二）の作である「春婦昌谷」（四六二頁）の末尾の二句を挙げることができる。

狭行無廓路 狭行 廓路無く
壯士徒輕躁 壯士 徒らに輕躁

隘路に行くのは大路が無いためであり、そのことによって、本来は勇ましい存在である壯士の心も落ち着きなくそわそわするという。自身の境遇を語る場面であるから、李

賀が自分を「壮士」になぞらえているのは明らかである。

理想の実現に対する固い意志を持つ者であっても、自他の関係性によっては、その意志を挫かれることがあるのであり、自分一個の努力によっては意に沿う人生航路を歩むことはできないというのが、李賀による「壮士」の捉え方であつたと把握しておくことができる。

勇壮な者としての「壮士」、そしてそうであるがゆえに不遇者でもありうる「壮士」、こうした「壮士」像は、多くの詩人が繰り返し詠じることによって定型性を強化していった。それに対して「書客」は、先述のとおり常套的な詩語ではなく、従って特定のイメージを想起させるものではなかった。

このように、「壮士」と「書客」は性質の異なる語であるが、ここで問題となるのは、なぜ全八句の短詩に李賀自身を指す語が形を変えて二度用いられているのかということだ。「秋来」は換韻によって四句ずつ前段と後段に分かれるが、それぞれの段に「壮士」と「書客」の語が布置されているという点を手がかりとして、「秋来」における自己表象の内実を究明したい。

前段と後段を比較すると、複数の共通項が認められる。具体的にはまず、第一句の「桐風」と第六句の「雨冷」が

ともに気象に関する語となっている。続いて、第二句で鳴いていた「絡緯」の音は、第七句における幽鬼の歌声と対応する。どちらも聴覚的に捉えられた事物である。

そして、第三・四句と第八句は、どちらも未然の事態を詠じている点で共通する。第三・四句は、すでに自己の存在しない将来の事態について詠じていた。つまり、語り手は自分の死後を想像して、書き残した書物の消滅という、おそらく確実に起こるであろう事態に思い至っているのである。それと対応するように、第八句も「千年」という膨大な時間を経過した後の事態について叙述している。

以上の諸点から了解されるように、前段と後段に詠じられている時空は、幽鬼が登場するか否かといった相違点を含みつつ、その実まったくの異空間というわけではなく、むしろ似通っているのである。換言すれば、後段は、前段で詠じられた現実の時空を虚構化した上で、もう一度それを語りなおしているということになる。

後段に詠じられている空間は、いわば糊塗された現実であつて、必ずしも前段とは無関係な別種の時空となつていくというわけではない。「香魂」や「鬼」といったように、幻視的な事物が詠じられてはいるものの、前段の現実描写を踏まえることで、後段もあくまで現実の相似形として語

られることになるのである。

前段と後段のこうした関連性を踏まえれば、「壮士」と「書客」といったように、李賀自身を示す語が繰り返されている理由が浮き彫りになる。すなわち、「秋来」は、「壮士」として不遇をかこつ自己を、「書客」として語りなす過程を提示した一篇と捉えることができるのである。

ここで強調しておきたいのは、自己を語るのではなく、語りなすことの重要性である。第三・四句に詠じられていたような詩巻消滅の暗い想像は、表現営為に重きを置く「書客」としての李賀の自己規定を否応なく拒まざるを得ない。そこで李賀は、現実を糊塗する形で現実の時空を解釈しなおし、そこに「書客」としての自己を観念的に定立しようと試みる。その前段と後段の時空の間に、陽画（ポジ）と陰画（ネガ）の関係性を見出し、後段の時空をあくまで前段における現実の相似形として語ること、で、「書客」としての自己に確かさをもたらすことが可能になるのである。

「書客」と類似した李賀の詩語に「書鬼」があり、次のように詠じられている。

9 金家香街千輪鳴

金家の香街 千輪鳴り

10 揚雄秋室無俗声

揚雄の秋室 俗声無し

11 願携漢戟招書鬼

願はくは漢戟を携へて書鬼を招き

12 休令恨骨填蒿里

恨骨をして蒿里を填めしむるを休

めよ

（「緑章封事」、三〇六頁）

貴族が栄える一方で、揚雄のような文人は顧みられないという現状を詠じた上で、「書鬼」、表現者としての靈魂を招き寄せていただいて、恨みのこもった骨をむざむざ墓所にうずもれたままにしないでほしいと天帝に向かって祈願している。

このように、李賀は表現者としての靈魂に思いを致していた。ところが「秋来」においては、第六句に「雨冷ややかに香魂 書客を弔す」とあったとおり、「書客」は死者を「弔」する主体たるべき生者としての能動性を剥奪され、反対に「香魂」に慰撫されるような受動的な存在となっている。

しかし、李賀は「書客」としての自己の窮状に対して無力ではなかった。やがて「土中」に埋没せざるをえない「書客」の行く末を自覚しつつも、現実の相似形としての時空を構築し、そこに「書客」たる自己の定立を試みた。そして李賀は表現営為に没入する自分自身に、「秋来」の末尾の句が物語るような、埋没した碧玉としての価値を認

めたのである。埋没してはいても、碧玉は碧玉である限り、後世の発掘を期待させずにはおかぬ。碧玉の比喩によって、李賀は現実における文学的な不遇を相対化し、表現者たる自己の在り様を、他でもない、詩そのものによって闡明したのである。

六 おわりに

ここまで、「書客」の語を中心として、李賀の詩における表現者としての自己認識について考察を進めてきた。

「高軒過」における「書客」は、「翅」を「垂」れざるを得ないでいるが、やがて韓愈や皇甫湜によって生気を与えられるものとして描かれていた。表現営為への従事者たる自負は、有力な他者によって救済されうるという無邪気な信賴が、「高軒過」には残されている。

「題帰夢」における「書客」は、故郷である昌谷を夢に見て、そこに残してきた家族の期待に沿えない現状に甘んじていることしかできない、いわば敗北者としての姿を露呈している。

「秋来」の「書客」は、表現者でありながら、詩巻の消滅によってその表現が否定されかねない存在であった。そうした自己存在の窮状にあつて、李賀は「書客」としての

自己を放棄するのではなく、むしろ現実の側を相対化し、表現によって表現の否定に抵抗するという方途をもって、表現者としての自己を貫いたのであった。

李賀の詩における「書客」は、「天に功無からしむ」べく天上を志向し、それが適わずして實際生活上の困窮にあえぎ、それでも「書客」が「書客」としてあるための方途として、積極的下降によって「土中」のような地下を志向する。

上昇と下降は生と死にも対応する。「高軒過」の「書客」は「死草」に比擬されていたが、それは韓愈や皇甫湜の恩沢の比喩である「華風」によって「生」氣を得るものとして詠じられていた。対して「秋来」における「書客」は「土中」に埋葬される。死の中にこそ表現者としての生があるという逆説的で苦々しい認識が、李賀における表現者としての自己認識であつたのだ。

注

(1) 劉学鍔・余恕誠『李商隱文編年校注』中華書局、二〇〇二、二二六五頁。

(2) 「客」字を構成要素とする語をもって自己を指す先行例として、例えば杜甫（七一―七七〇）の手になる「醉時歌」

『杜詩詳註』卷三)の「杜陵野客人更嗤、被褐短窄鬢如絲」や、同じく杜甫による「乾元中寓居同谷県作歌七首(其一)」「杜詩詳註」卷八)の「有客有客字子美、白頭亂髮垂過耳」といった句が挙げられる。

(3) 制作年は呉企明『李長吉歌詩編年箋注』(中華書局、二〇一二)に依拠した。また、李賀の詩の引用についても同書に拠ることとし、それに際しては頁数のみ記す。

(4) 張籍(七六六?~八三〇?)の「和左司元郎中秋居十首」〈其五〉(徐礼節・余恕誠『張籍集繫年校注』中華書局、二〇一一、三六三頁)に、「書客多呈帖、琴僧与合絃」とある。

(5) 許渾(七八八~八六〇?)の「長慶寺遇常州阮秀才」(羅時進『丁卯集箋証』江西人民出版社、一九九八、二五三頁)に、「高閣晴軒对一峰、毗陵書客此相逢。晚收紅葉題詩遍、秋待黄花釀酒濃」と詠じられて、ここの「書客」は詩人を意味していると考えられるが、許渾自身ではなく詩題にいう「常州の阮秀才」を指している。

(6) 引用中の旧字は通行字体に直した。以下同様。

(7) この句のとりわけ「花作骨」の部分については、拙論「李賀の詩における『花作骨』の批評効果とその淵源」(『筑波中国文化論叢』第三六号、二〇一七)を参照。

(8) 「秋来」の末尾の句は、例えば『莊子』外物篇に、「人主莫不欲其臣之忠、而忠未必信。故伍員流於江、莫弘死於蜀、藏其血三年、化而為碧」などと記されている、いわゆる碧血故事を踏まえている。詩賦の表現における典拠としての碧血故

事については、拙論「李賀詩に見る素材の自在性——碧血の系譜を例として——」(『中唐文学会報』第二二号、二〇一五)を参照。

(9) 初句の方については清人である王琦の注に、「秋風至則桐葉落、壯士聞而心驚、悲年歲之不我与也」とあり、第六句の方については明人である曾益の注に、「斯時也、誰復知我、則惟有冷雨之侵、香魂之相弔而已」とある。また、鈴木虎雄『李長吉歌詩集 上』(岩波文庫、一九六二)は、「壯士」を「壯士たるわたし」(二二頁)と訳し、「書客」については「作者自己をさす」(二二頁)と語釈を付している。

(10) 唐代までの荊軻受容については、松本肇「柳宗元の『詠荊軻』をめぐる——荊軻受容の視角」(『唐代文学の視点』研文出版、二〇〇六、所収)に整理されている。

(11) 荊軻の歌が荊軻自身の「悲劇的結末を先取りするもの」として機能しているという見方については、谷口洋『史記』にみえる秦末漢初の歌と伝説——荊軻・項羽・劉邦・呂后をめぐる歌物語——(『中国文学報』七八、二〇〇九、二五頁)に指摘がある。

(茗溪学園中学校高等学校)